



30分でできるMobile Linkシンクロナイゼーション (Oracle - Adaptive Server[®] Anywhere)



目次

はじめに
MobileLink シンクロナイゼーション概要5
Oracle 統合データベースの設定7 Mobilel ink システム・テーブルのインストール
統合データベースの ODBC データソースの定義
リモート Adaptive Server Anywhere データベースの設定10
新しい Adaptive Server Anywhere リモートデータベースの作成と起動10
SCOTT/TIGER Oracle スキーマのサブセットの移動10
リモート・シンクロナイゼーション・パブリケーション、 シンクロナイゼーション・ユーザ、
シンクロナイゼーション・サブスクリプションの作成
MobileLink シンクロナイゼーションサーバの起動19
MobileLink シンクロナイゼーションサーバの起動(dbmlsrv9)19
MobileLink シンクロナイゼーション・クライアント・ユーティリティの起動21
シンクロナイゼーション・クライントの起動
リモートデータベースのローの値の確認22
法的注意



はじめに

本書は、Oracle統合データベースとAdaptive Server Anywhereリモートデータベース間のデータ同期手順について説明しています。ここでは、Oracleのサンプルデータベースを使用して、1つのリモートデー タベースを設定、簡単な同期を最初から確立する方法を示しています。

Mobile Linkを使用すると、ODBCに準拠した中央の統合データベースと多くのAdaptive Server Anywhereまたは UltraLiteリモートデータベースを同期することができます。Mobile Linkシンクロナイ ゼーションは、アイエニウェア・ソリューションズが提供するデータベース統合パッケージ、SQL Anywhere Studioのコンポーネントです。

シンクロナイゼーション・システムの主要部分を以下の図に示します。



ASA: Adaptive Server Anywhere

- 統合データベース
 このデータベースは、シンクロナイゼーション・システムのすべてのデータを保持しています。
- 統合データベースサーバ
 このサーバは統合データベースを管理します。このサーバは、以下のODBC準拠のデータベースのいずれかが必要です。
 - ♦ Adaptive Server Anywhere
 - ♦ Adaptive Server Enterprise
 - ♦ Oracle
 - ♦ Microsoft SQL Server



♦ IBM DB2

本資料では、統合データベース・サーバとしてOracleを使用します。

 Mobile Linkシンクロナイゼーション・サーバ 本サーバ、dbmlsrv9は、シンクロナイゼーション・プロセスを管理し、すべての Mobile Linkクライアントと統合データベース・サーバ間のインタフェースを提 供します。

● ネットワーク

Mobile Linkシンクロナイゼーション・サーバとMobile Linkクライアント (dbmlsync または UltraLite)間の接続には、いくつかのネットワークプロトコ ルが使用できます。ここでは、TCP/IPプロトコルを使用します。

- Mobile Linkクライアント
 - クライアントは、Pocket PCやPalm Pilotなどのハンドヘルド・デバイス、サーバ またはデスクトップパソコン、携帯電話や自動販売機などの組み込みデバイスに インストールすることができます。Mobile Linkクライアントとして、Adaptive Server Anywhere (ここで使用)とUltraLite、2つのタイプのクライアントがサポー トされています。Mobile Link シンクロナイゼーションではどちらでも使用するこ とができます。

Mobile Linkシンクロナイゼーション・システムでは、以下のソフトウェアが必要となります。

- 完全なSQL Anywhere Studio 9.0.1
- 完全なOracle Enterprise EditionとSCOTT/TIGERサンプル・データベース



MobileLinkシンクロナイゼーション概要

Mobile Linkシンクロナイゼーションを行うために、Oracleデータベースを設定します。これに必要な手順の概要を以下に示します。各手順については、次の章で詳細に説明しています。

- Oracle統合データベースの設定
 - あらかじめ定義したSQLスクリプト(syncora.sql)を実行し、Oracleデータベースを Mobile Link統合データベースにするよう準備します。これにより、Mobile Linkテーブル とストアド・プロシージャが追加されます。
 - アイエニウェア・ソリューションズのOracle Wire Protocol ODBCドライバを使用して、 OracleデータベースのODBCデータソースを定義します。
- リモートAdaptive Server Anywhereデータベースの設定
 - 1. Adaptive Server Anywhereデータベースを作成します。
 - 2. Adaptive Server Anywhereデータベースに、同期テーブルなどのOracleスキーマのサブ セットを移行します。
 - リモート・シンクロナイゼーション・パブリケーション、シンクロナイゼーション・ユー ザとシンクロナイゼーション・サブスクリプションを作成します。
- データをアップロード、ダウンロードするための同期スクリプトの作成
 - 1. Mobile Linkは、柔軟性を持つ同期スクリプトを使用します。これによりユーザはデータ を同期することができるようになります。同期スクリプトは、以下を定義します。
 - リモートデータベースからアップロードされたデータの統合データベースへの適用方法
 - 統合データベースからダウンロードするデータ

これらのスクリプトは、個々のステートメントか、統合データベース内のストアド・プロシージャ・コールになります。簡単なケースでは、コマンド・ライン・オプションを使用して、Mobile Linkシンクロナイゼーション・サーバから自動的にスクリプトを生成するよう設定することもできます。



- Mobille Linkシンクロナイゼーションの起動
 - Mobile Linkシンクロナイゼーション・サーバを起動します(dbmlsrv9)。
 これにより、Mobile Linkサーバは、クライアントのシンクロナイゼーション・リクエストを待つようになります。
 - Mobile Linkシンクロナイゼーション・クライアント・ユーティリティ(dbmlsync)を起動してシンクロナイゼーション・セッションを開始します。

NOTE

本書のいくつかの例は、Sybase Centralによって示されています。Sybase Centralは、Adaptive Server Anywhereデータベースの設定、プロパティ、ユーティリティをグラフィカルなユーザ・インターフェー スで提供するデータベース管理ツールです。Sybase Centralは、ほとんどの場合、ウィザードにより使 用しますが、Sybase Central、Interactive SQLやコマンド・ラインを交互に使用することもできます。



Oracle統合データベースの設定

ここでは、Oracleのデモンストレーションやトレーニングに使われる、SCOTT/TIGERサンプル・データ ベースを使用します。

MobileLinkシステム・テーブルのインストール

Mobile Linkには、SQL Anywhereインストール先の¥MobiLink¥setupサブディレクトリにsyncora.sqlと呼 ばれるスクリプトがあります。syncora.sql は、OracleデータベースをMobile Link 統合データベースと して使用できるようにするためのSQLステートメントを含むファイルです。このスクリプトは、必要な システムテーブルとML_で始まるプロシージャを作成します。Mobile Linkは、必要なシステムテーブル とML_で始まるプロシージャを作成します。Mobile Link は、シンクロナイゼーション・プロセス中には、 これらのテーブルやストアド・プロシージャを使って動作します。

~MobiLinkシステムテーブルのインストール~

- コマンド・プロンプトで、SQL Anywhere のインストール先ディレクトリ¥MobiLink¥setupへ 移動します。
- 2. 以下のコマンドを入力し、syncora.sqlスクリプトを実行します。

sqlplus scott/tiger @syncora.sql

Oracleサービス名を指定する必要がある場合は、以下のコマンド入力します。

sqlplus scott/tiger@oracle_service_name @syncora.sql

統合データベースのODBCデータソースの定義

アイエニウェア・ソリューションズのOracle Wire Protocolドライバを使用して、Oracleサンプルデータ ベースのODBCデータソースを定義します。

~統合データベースのODBCデータソースの定義~

ODBCアドミニストレータを起動します。
 [スタート]メニューから、[プログラム]→[SQL Anywhere 9]→[Adaptive Server Anywhere]→
 [ODBC アドミニストレータ]を選択します。
 ODBCデータソースアドミニストレータが表示されます。



2. [ユーザーDSN]タブで[追加]をクリックします。



データソースの新規作成ダイアログが表示されます。
 「iAnywhere Solutions 9 – Oracle Wire Protocol」を選択し、[完了]をクリックします。



4. ODBC Oracle Wire Protocol Driver Setupダイアログが表示されます。

ODBC Oracle Wire Prote General Advanced	Performance	o About	<u>1</u> ×
Data Source Name: Dyscription: Hgut Eort Number: SjD:	[[[1521 [0RCL		Help
Test Connect	OK	キャンセル	通用(4)



5. Data Source Nameに"oracle_consolidated"と入力し、適当なhost name(名前かOracleデータ ベース・サーバのIPアドレス)、Oracleリスナのport number(デフォルトは1521)、Oracle インスタンスを参照するOracle SID(Sysem Identifier)を入力し、[OK]をクリックします。

ODBC Oracle Wire Prote General Advanced	col Driver Setup Performance About	<u>rx</u>
Data Source Name: Dyscription: Hgst: Bott Number: S(D:	oracle_consolidated	Heb
Test Connect	OK キャンセル	

6. [OK]をクリックします。



同期スクリプト

本書では、同期スクリプトの手動追加は行いません。特別なコマンド・ライン・オプションでMobile Link シンクロナイゼーション・サーバを起動すると、デフォルトのスクリプトは自動的に生成されます。 こ れらのスクリプトをベースとして、自身のスクリプトを生成することもできます。

Oracle統合データベースの設定はこれで終了です。



リモートAdaptive Server Anywhereデータベースの設定

Mobile Linkは、統合データベース・サーバと多数のモバイル・データベースのシンクロナイゼーション を行うためにデザインされています。この章では、1つのリモートデータベースを作成、統合スキーマの 選択部分を移動、シンクロナイゼーション・パブリケーション、ユーザとサブスクリプションを作成し ます。

Adaptive Server Anywhereデータベースを作成するための1つの方法がdbinitコマンド・ライン・ユーティリティを使用した方法です。ここでは、リモートデータベースをremote1と呼ぶことにします。

新しいAdaptive Server Anywhereリモートデータペースの作成と起動

- 1. コマンド・プロンプトで、データベースを作成したいディレクトリに移動します。
- 2. 以下のコマンドを入力して、データベースを作成します。

dbinit remote1.db

3. 以下を入力して、データベースを起動します。

dbeng9 remote1.db

SCOTT/TIGER Oracleスキーマのサブセットの移動

SCOTT/TIGERスキーマのサブセットの移動では、以下を行います。

- リモートデータベースとの接続
- リモートサーバと外部ログインの作成
- Sybase Centralのデータ移行ウィザードの使用



~Adaptive Server AnywhereデータベースへのOracleスキーマのサブセットの移動~

1. Sybase Centralを起動します。

[スタート]メニューから、[プログラム]→[SQL Anywhere 9]→[Sybase Central] を選択します。



Sybase Centralの左側のペインから「Adaptive Server Anywhere 9」を選択します。
 メニューバーから[ファイル]→[接続]を選択します。
 接続ダイアログが表示されます。

抹統	×
D = 2 <- 2 Will	
() 次の値を使用してデータベースに対して自分自身を識別します。	
(● ユーザロとパスワードを指定します。(5)	
2-9 D(U):	
バスワード(P):	
○ 統合化ログインの使用()	
プロファイルに始納されているダフォルトの機能値を使用できます。 ぐ なし(の) ぐ の080 データ・ソースを(N) ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	



[ID]タブを選択し、ユーザに"DBA"と、パスワードに"SQL"と入力します。[データベース]タブでは、サーバ名に"remote1"と入力します。
 [OK]をクリックし接続します。

捕获 <u>×</u>	接线
D ≠-2<-> Will	D ≠ - 9 <- 2 [Will]
() 次の値を使用してデータベースに対して自分自身を観測します。	(1) 次の情報はデータベース・ワーバを離別します。
○ ユーザ D とパスワードを指定します。(5)	サーバ名(S): remote1 ・ 検索()
л-ЧюЩ: реа	RBRD:
パスワード(P): ###	□ ネットワーク上でダータベース・サーバを検索(E)
○ 統合化ログインの使用()	
	次の情報はデータペースを識別します。
フロファイルに格納されているデフォルトの接続値を使用できます。	5-0x-2500
	2-2A-26(0):
€ ¢ L(Q)	データベース・ファイル(で): ●県(8)
C 00BC F-9-V-28(N)	時号化キー(<u>(</u>):
	✓ 自動的にデータベースを超動(A)
C 00BC #= 9 · 9 = 3 · 9 = 4 · 0 · 0	
Y 01HU	■ 編算切聴後にテータベースを停止(P)
OK キャンセル ヘルフ	0K キャンセル ヘルブ

リモートサーバを作成します。
 新しいリモート・サーバの作成ウィザードを起動します。
 左側のペインからリモート・サーバ・フォルダを選択します。ファイルメニューから[新規]
 →[リモート・サーバ]を選択します。
 新しいリモート・サーバの作成ウィザードが起動します。





5. リモートサーバ名を"my_oracle"とし、[次へ]をクリックします。



6. サーバ・タイプに「Oracle」を選択し、[次へ]をクリックします。



7. ウィザードの次のページでは、接続情報に"oracle_consolidated"と入力し、[次へ]をクリックします。





8. デフォルトのまま、[次へ]をクリックします。

熱新しいりモート・サーバの作成		×
	このリモート・サーバを読み込み専用のデータ・ソースにすることができます。 その場合、あらゆる更新要求がデータベースによって担否されます。 「 このリモート・サーバを読み込み専用データ・ソースにする(M)	
	< 戻る(D) 次へ(N)> 光了(F) キャンセル	

ウィザードの最終ページでは、「現在のユーザの外部ログインを作成する」を選択します。
 ログイン名に"scott"、パスワードに"tiger"を入力し、[完了]をクリックします。
 これで新しいリモート・サーバの作成ウィザードが終了します。

🌺新しんりモート・サーバの作成		×
	このデータベースにユーザモ データベースで定義されたパ を定義していない場合、リモ して、このユーザの代替ログ	NBA・として接続しました。リモート・サーバがこの (スワードと同じパスワードを使用してユーザ DBA・ ート・サーバに接続するには、外部ログインを作成 「ソ名とパスワードを割り出てる出表があります。
	☞ 現在のユーザの外部ログ	インを作成する (E)
	ログイン名(L):	scott
	パスワード(P):	****
	パスワードの確認(()):	****
	(先7)をクリックすると、リ	モート・サーバが作成されます。
	< 戻る(B)	次へ(1)> 第7(5) キャンセル



10. Oracleスキーマを移動します。

左側のペインで「Adaptive Server Anywhere 9」プラグイン選択し、右側のペインで[ユーテ イリティ]タブを選択し「データベースの移行」をダブルクリックします。

Sybase Central ファイル(E) 編集(E) ドゥー(A) やール(T) タフカ(A)	X
Adaptive Server Anywhere 9	
フォルダ × サーバ ユ Sybase Central Satistics Adaptive Server Anywhere S Satistics F Fremdel F <th>マノリティ 均明 ・ スのパメガ 新しいデータベースを作成します。 ・ スのパメガアンブレード 秋夜のパージョンにデータベースをアップグレードします。 ・ スのパメガアンブワレード 秋夜のパージョンにデータベースをアップグレードします。 ・ スのパメガア アーカイブにデータベースをアップグレードします。 ・ スのパメガア アーカイブレデータベースをリストアします。 ・ スのアンガード SQL コマンド・ファイルにデータベースをアンフードします。 ・ スの作品 データベース・ファイルのパックアップ・コピーを作成します。 ・ スの作品 データベース・ファイルのパンクアップ・コピーを作成します。 ・ スの作品 データベース・ファイルのパンクアップ・コピーを作成します。 ・ スの作品 データベース・ファイルのパンクアップ・コピーを作成します。 ・ スの作品 データベースの内容を確認します。 ・ スの原類 ゲータベース向けのライト・フェージャースを作成します。 ・ スの原類 ゲータベース向けのライト・アイルを作成して編集します。 ・ スの読む データベースのログ・フィイルを確成します。 ・ パルの作成 データベースのログ・フィイルを確成します。 ・ パル支援 データベースのログ・フィイル設定を実施します。 ・ パル設定の実施 データベースのフィノンドウを描述ます。 ・ スの総合 リーションドウスペースのマイル設定を実施します。 ・ スの総合 リーシット・サーバやのデータベースに構造とデータを移行します… ・ スの総合 リーンスを管護します。 ・ ド・サーバやうデンドウスに構造とデータを移行します… ・ シスクレータを描く ハンドウを留きます。 ・ ドレータを描く ハンドウを留きます。 ・ ジェースの参加合</th>	マノリティ 均明 ・ スのパメガ 新しいデータベースを作成します。 ・ スのパメガアンブレード 秋夜のパージョンにデータベースをアップグレードします。 ・ スのパメガアンブワレード 秋夜のパージョンにデータベースをアップグレードします。 ・ スのパメガア アーカイブにデータベースをアップグレードします。 ・ スのパメガア アーカイブレデータベースをリストアします。 ・ スのアンガード SQL コマンド・ファイルにデータベースをアンフードします。 ・ スの作品 データベース・ファイルのパックアップ・コピーを作成します。 ・ スの作品 データベース・ファイルのパンクアップ・コピーを作成します。 ・ スの作品 データベース・ファイルのパンクアップ・コピーを作成します。 ・ スの作品 データベース・ファイルのパンクアップ・コピーを作成します。 ・ スの作品 データベースの内容を確認します。 ・ スの原類 ゲータベース向けのライト・フェージャースを作成します。 ・ スの原類 ゲータベース向けのライト・アイルを作成して編集します。 ・ スの読む データベースのログ・フィイルを確成します。 ・ パルの作成 データベースのログ・フィイルを確成します。 ・ パル支援 データベースのログ・フィイル設定を実施します。 ・ パル設定の実施 データベースのフィノンドウを描述ます。 ・ スの総合 リーションドウスペースのマイル設定を実施します。 ・ スの総合 リーシット・サーバやのデータベースに構造とデータを移行します… ・ スの総合 リーンスを管護します。 ・ ド・サーバやうデンドウスに構造とデータを移行します… ・ シスクレータを描く ハンドウを留きます。 ・ ドレータを描く ハンドウを留きます。 ・ ジェースの参加合

データベースの移行ウィザードが起動します。
 [次へ]をクリックします。





メデータベースの移行	移行先のデータへ	(ースを指定してく)	5au. (J	×
	S#	ユーザ	<u>ए</u> = ग	コンピュータ
		< 戻る(8)	≭^(N) ×	70 *+>t

12. 移行先データベースに「remote1」を選択し、[次へ]をクリックします。

13. 次のページでは、移行先のリモート・サーバに「my_oracle」を選択し、[次へ]をクリックします。



ドロップダウン・メニューからユーザに「SCOTT」を選択します。
 そして、移動するテーブルとして「DEPT」と「EMP」を選択し、[次へ]をクリックします。





データベースの報行	移行したテーブルを所有する	5ユーザを指定してくだ:	ŧι. ლ	X
	811 👷 DBA	2XV	ŀ	
X				
	今ずぐにユーザを作成(C)		
	< 戻る(8)	(約~N) >	常了ED	キャンセル

15. 移行先に所属するユーザ「DBA」を選択し、[次へ]をクリックします。

16. ウィザードの最終ページでは、「データの移行(D)」のチェックを外し、[完了]をクリックし ます。



17. Oracleスキーマの移動はこれで終了です。





リモート・シンクロナイゼーション・パブリケーション、シンクロナイゼーション・ユーザ、 シンクロナイゼーション・サブスクリプションの作成

1. Interactive SQLを起動します。

Sybase Centralの左側のペインで、「remote1データベース」を選択します。ファイルメニューから 「Interactive SQLを開く」を選択します。

🗞 Sybase Central	_ D ×
ファイル(E) 編集(E) ビュー(シ) ツール(E) タスク(A) ヘルブ(E)	
Interactive SQL 結影(学)	
所有者別にオブジェクトをフィルタ(0)	
475D/W	
(7)新(Q) 日次 接続されたユーザ テーブル・ページの使用状況 テーブル・ロック プロファイル	
テータベースのアップグレードロー フォルダ	
テータベースのバックアップ(8).	_
1/92/1927-13-520/1850/0- E. J.C. D. K. L.	
テーダベースのサンロード電圧 コインデックス	
データペースの時間での コトリガ	
カスタル陽会の作成(1) コシステム・トリガ	
データペースの移行900_ コープロシージャとファンクション	
インデックス・コンサルダント(2). コーイベント	
プロファイリング(2) ・ コ ドメイン	
プロパティ(8) ユーザとグループ	
終了(2)	
SQL Remote 1 - 7	
Mobile Link ユーザ	
P Sol Renote 1 - V	
Mobile Link 3 - 9 Or a Light 7 - 9 - 0 Alter	
B- Utra Light プロジェ Vich II:= Vich II:= Vich	
a− in U€− F · U− Λ	
□ Web サービス	
😓 📓 Mobile Link 网络 9	
遺訳された各 データベースで Interactive SOL ウィンドウを聞きます。	

Connectダイアログが表示されます。

シンクロナイゼーション情報を入力します。
 Interactive SQLで以下のコマンドを実行します。

CREATE PUBLICATION scott_pub (TABLE dept, TABLE emp);

CREATE SYNCHRONIZATION USER ml_scott;

CREATE SYNCHRONIZATION SUBSCRIPTION TO scott_pub FOR ml_scott TYPE TCPIP

ADDRESS 'host=localhost' OPTION scriptversion='ver1';

リモートデータベースと統合データベースの準備ができました。これでシンクロナイゼーション・プロセスを開始することができます。



MobileLinkシンクロナイゼーションサーバの起動

MobileLinkシンクロナイゼーションサーバの起動(dbmlsrv9)

1. コマンド・プロンプトで、以下を1行に入力します。

dbmlsrv9 -c "dsn=oracle_consolidated;uid=scott;pwd=tiger" -o serverOut.txt -v+ -dl -za -zu+ -x tcpip

NOTE

Mobile Linkテクノロジでは、コマンドライン・オプションをファイル化し、そのファイルを暗号化する こともできます。dbfhideユーティリティの詳細については、Mobile Linkのドキュメントをご覧ください。

dbmlsrv9ユーティリティで使用される各オプションを以下の表に示します。-o、-v、-dlオプションは、 デバッグ情報や障害情報を提供します。これらのロギング・オプションは開発環境で使用するのに有効 です。通常の場合、-vオプションと-dlオプションは、パフォーマンス上の理由により、運用段階では使 用しません。

オプション	説明
-c	接続文字列の前に付けます
-0	メッセージログファイルserverOut.txtを指定します
-v+	- -vオプションはどの情報をログするかを指定します。-v+オプションを
	使用すると最大限詳細なログを出力することができます
-dl	画面にすべてのログメッセージを表示します
-za	自動スクリプティングをONにします。-zaオプションは、通常、自身の
	スクリプトを記述するための開始点としてスクリプトを生成するのに
	使用されます。スクリプトは、リモート側が同期したときに最初に生
	成されます。スクリプト・バージョンがすでに存在する場合は、-zaオ
	プションは何の影響も与えません
-zu+	新しいユーザを自動で追加します
-x	Mobile Linkクライアントの通信プロトコルとパラメータを設定します



2. Mobile Linkシンクロナイゼーション・サーバがリクエストを受け付けられるようになったことを 示すダイアログが表示されます。



NOTE

リモートデータベースのタイムスタンプの精度を統合データベースであるOracle9iに合わせます。 Adaptive Server AnywhereのTIMESTAMP値の精度は、小数点以下6桁まで可能となっています。

TIMESTAMP値を小数点以下3桁にしている他のソフトウエアとの互換性を維持する場合、 TRUNCATE_TIMESTAMP_VALUESオプションをONに設定することで、Adaptive Server Anywhereが格納する小数点以下の桁数を制限することができます。DEFAULT_TIMESTAMP_INCREMENTオプション により、TIMESTAMP値の小数点以下の桁数を決定します。

set option DEFAULT_TIMESTAMP_INCREMENT=1000000;

set option public TRUNCATE_TIMESTAMP_VALUES='On';

本設定は、リモートデータベース上であらかじめ実行しておかなければなりません。



MobileLinkシンクロナイゼーション・クライアント・ユーティ リティの起動

dbmlsyncユーティリティは、Adaptive Server Anywhereリモート・データベースのMobile Linkシンクロ ナイゼーションを開始します。

シンクロナイゼーション・クライントの起動

1. コマンド・プロンプトで、以下を1行に入力します。

dbmlsync -c "eng=remote1;uid=dba;pwd=sql" -o rem1.txt -v+

-e "SendColumnNames=on"

各オプションを以下の表に示します。

オプション	説明
-C	接続文字列の前に付けます
-0	メッセージログファイルrem1.txtを指定します
-v+	-vオプションはどの情報をログするかを指定します。-v+オプションを
	使用すると最大限詳細なログを出力することができます
-е	-eオプションは、拡張オプションを指定します。このケースでは、カラ
	ム名をMobile Linkシンクロナイゼーション・サーバに送るために使用
	されています(自動スクリプティングに必要)。SendColumnNamesパ
	ラメータは、通常、Mobile Linkシンクロナイゼーション・サーバで同
	 期スクリプトを自動的に生成するために、-zaオプションや-zeオプショ
	ンと一緒に使われます。



 Mobile Linkシンクロナイゼーション・クライアントをスタートさせると、Mobile Linkシンクロナイ ゼーションが成功したことを示す出力画面が表示されます。Oracleテーブルのデータは、これで、 Adaptive Server Anywhereデータベースに表示されるようになります。



リモート・データベースのローの値を確認して、シンクロナイゼーションが成功したことを確かめ ることができます。

リモートデータベースのローの値の確認

- 1. Sybase Centralを開き、Adaptive Server Anywhere 9プラグインを使用してremote1データベースに 接続します(まだ接続していない場合)。
- 「テーブル」フォルダを開き、右側のペインで[データ]タブを選択します。
 Oracle統合データベースからダウンロードしたデータが表示されます。





法的注意

Copyright(C) 2004-2005 iAnywhere Solutions, Inc. All rights reserved.

iAnywhere、iAnywhere Solutions、iAnywhere Solutions(ロゴ)、Adaptive Server、SQL Anywhereは iAnywhere Solutions, Inc.またはSybase,Inc.とその系列会社の米国または日本における登録商標または 商標です。その他の商標はすべて各社に帰属します。

Mobile Linkの技術には、Certicom,Inc.より供給を受けたコンポーネントが含まれています。これらのコンポーネントは特許によって保護されています。

本書に記載された情報、助言、推奨、ソフトウェア、文書、データ、サービス、ロゴ、商標、図版、テキスト、写真、およびその他の資料(これらすべてを"資料"と総称する)は、iAnywhere Solutions,Inc.とその供給元に帰属し、著作権や商標の法律および国際条約によって保護されています。また、これらの資料はいずれも、iAnywhere Solutions,Inc.とその供給元の知的所有権の対象となるものであり、iAnywhere Solutions,Inc.とその供給元がこれらの権利のすべてを保有するものとします。

資料のいかなる部分も、iAnywhere Solutionsの知的所有権のライセンスを付与したり、既存のライセン ス契約に修正を加えることを認めるものではないものとします。

資料は無保証で提供されるものであり、いかなる保証も行われません。iAnywhere Solutionsは、資料に 関するすべての陳述と保証を明示的に拒否します。これには、商業性、特定の目的への整合性、非侵害 性の黙示的な保証を無制限に含みます。

iAnywhere Solutionsは、資料自体の、または資料が依拠していると思われる内容、結果、正確性、適時 性、完全性に関して、いかなる理由であろうと保証や陳述を行いません。Sybaseは、資料が途切れてい ないこと、誤りがないこと、いかなる欠陥も修正されていることに関して保証や陳述を行いません。こ こでは、「iAnywhere Solutions」とは、iAnywhere Solutions, Inc.またはSybase,Inc.とその部門、子会社、 継承者、および親会社と、その従業員、パートナー、社長、代理人、および代表者と、さらに資料を提 供した第三者の情報元や提供者を表します。

*本書は、米国iAnywhere Solutions社が作成・テストしたものを日本語に翻訳したものです。





アイエニウェア・ソリューションズ株式会社 <u>http://www.ianywhere.jp/</u>